

タイ族在地知識人によるムンの「歴史」

—シプソンパンナーのムンロン（勐龍）の事例—

The Making of local History:
A Case of Tai Intellectuals of Moeng Long, Sipsongpanna

イサラ・ヤーナターン*

Isra YANATAN

Transnational economic development between Yunnan and Southeast Asia which begun in the 1990s has resulted to an economic boom at border towns. However, in the midst of the rapidly economic development, ethnic people living at the frontiers continue to experience both socio-economic and cultural marginalization. This is particularly true in the case of Sipsongpanna, an autonomous prefecture located at the Southwestern Yunnan, inhabited by a sub-group of Tai-speaking people called Tai Lue. Specifically, Sipsongpanna became an ethnic tourist spot as a result of its modernization since the end of the 1980s. However, this led several ethnic cultures to be invented for ethnic tourist business.

Against this background, this paper aims to analyze how local intellectuals of Sipsongpanna reconstruct their own ethnic identities. In my analysis, I focused on the case of Moeng Long, an ancient border town located at the most southern part of Sipsongpanna Autonomous Prefecture. Specifically, I tried to study the process utilized by the local intellectuals of the Moeng Long in making their own Video-CD on religious historical monuments of the said town.

I argue that the making of this Video-CD by the local intellectuals of Moeng Long is an obvious indication of the initiatives of the local intellectuals to reconstruct their own cultural identity. Accordingly, they re-interpreted and re-present it via the modern technology. Furthermore, this activity by the local intellectuals reflects how they were able to maximize their own cultural experiences with the cultural policy provided by the state.

1 はじめに

現在の中華人民共和国雲南省南部の、ミャンマー・ラオスと国境を接する地域には、1950年以前には、シプソンパンナー Sipsongpanna というタイ Tai 族の国があった。シプソンパンナーは、30個ほどのムン Moeng と呼ばれる小国¹⁾が集まってできており、その中心はムン・チェンフン Moeng

Cheng Hung であった。

シプソンパンナーは、1950年に中華人民共和国の一部に組み入れられ、1953年には西双版納傣族自治区となり、1955年に西双版納傣族自治州と改名された。1956年の土地改革のあと、タイ族がそれまで持っていた政治組織も改変させられた〔《西双版納自治州概況》編写組 1986：35-37〕。

*名古屋大学大学院

シプソンパンナーのタイ族は、一定の自治権は与えられたものの、中国の少数民族となった。筆者は、この中国の少数民族となったタイ族が、どのように自らの文化を継承し、それを位置づけなおし、そして発展させてきたかに関心がある。

そして、それを見る時に、筆者はタイ族知識人の活動に特に注目して議論したい。ここでいう、タイ族知識人とは、タイ文字（タム Tham 文字）²⁾を自由に読み書きでき、それを使ってタイ族文化に関わる文化的・社会的活動をおこなう存在のことを指す。シプソンパンナーのタイ族は、上座仏教を信仰しており、男性は普通、少年・青年時の数年から十数年ほどにわたる出家生活の中でタイ文字を学ぶ。これは、シプソンパンナーの南の、ミャンマーのシャン州東部やタイ国北部、ラオス北部のタイ族³⁾と共に通する文化的特徴でもあった。タイ族の「伝統的」な知識人たちは、その文字で本⁴⁾を書いたり書き写したりし、彼らの文化を発展・継承してきた。また、タイ文字の教育は、少数民族幹部養成大学である雲南民族学院でもなされてきており⁵⁾、そこで学んだタイ族エリートたちの中にも、タイ文字を自由に扱うことができるものが多い。

さて、タイ族の「伝統的」文字文化を上から規制する動きとして、最も大きな影響があったのは、1966年から1977年までの文化大革命である。その時代には、仏教は禁じられ、僧侶も強制的に還俗させられるか、より南のタイ族地域へ国境を越えて逃れるかした。経典も含めて、タイ文字で書かれた写本の多くは燃やされた。文字を学ぶ場所である寺院がなくなり文字を教える立場にある僧侶がいなくなったのはもちろん、人々が文字を学んだり書いたりすることもタブー視されるようになった。

文化大革命終了後、1970年代終わりになって、再び仏教の信仰が許されるようになると、タイ族の人々は隣接するミャンマーのシャン州東部から

タイ族僧侶を招き、仏教の復興を果たした。寺院も修築されて、仏教儀礼もなされるようになった。寺院でタム文字を学ぶ伝統も復活していった。1986年には、1956年に作られた新タイ文字（注2 参照）とともに、伝統的なタイ文字（タム文字）を公共の場で使えるようにするという決定がなされた。

一方、1980年代後半からは対外開放が積極的に進められるようになった。1992年以降は観光開発が盛んにされるようになって〔長谷川 2001：112-119〕、観光客に見せるためのタイ族文化が必要になったということも含めて、タイ族が自らの文化について積極的に再考し表現できる社会的状況が作られていったのである。

さて、こうした状況下におけるシプソンパンナーのタイ族知識人に関する研究として、デービス Davis、ワサン Wasan のものがある〔Davis 2003; Wasan 2005〕。彼らは、国境の南の同じタイ族地域から、さまざまな文化的要素がシプソンパンナーに現在も絶えず流入している、という事実に注目した。デービス、ワサンはこれらの流れを分析し、1980年代の後半からあらわれた、国境を越えた知識人、特に若い僧侶たちのネットワークの存在の重要性を指摘している。このネットワークは、伝統的に存在した交易・交通路を行き来すことによって、つくられ維持されている。このネットワークによって国外の様々な物資や情報が運ばれ、中国政府もそれを押しとどめることができないという。デービス、ワサンはまた、そのネットワークの中で、シプソンパンナーの寺院管理の中心としてつくられたチェンフンのパーチェー寺 Wat Paachee⁶⁾における若い僧侶たちの活動を特に重視している。

そこでデービスやワサンが分析しているのは、チェンフンにおいて仏教行政に関わって活躍している若い僧侶たちの持つ、南のタイ族地域とのネットワークである。つまり彼らは、チェンフンとい

うシプソンパンナーの中心を本拠地として活動する、知識人の中でも若い僧侶という一群について、特にネットワークとのかかわりを対象として考察をしているのである。

デービスやワサンは、例えば、国境近くに位置するムンロン Moeng Long という地については、雲南と北タイを結ぶルートの重要な拠点であり、僧侶も多く仏教が盛んであるということにのみ触れている。筆者は、国境を越えたネットワークの中で、ムンロンがチェンフンとは異なる重要な役割を果たしていたと考える。そこでは、若い僧侶の文化的活動も見られるが、それ以外の知識人の活動にも注目すべきものがある。そして、国境を越えるネットワークとは直接にはかかわらず、ムンロンというひとつの空間の中においておこなわれる、知識人によるさまざまな文化活動も存在するのである。

デービス、ワサンはまた、シプソンパンナーのタイ族と国境の南のタイ族とが同一の文化を持っているということを強調しすぎている。実際には、シプソンパンナー独自の文化というのも存在するのである。特にシプソンパンナーが1950年に中華人民共和国の一部となってからすでに50年あまりが経過しており、その間に中国の少数民族としての経験を通して、シプソンパンナーのタイ族は、自らの文化的アイデンティティをどのように表現するかということについて独特の方法を編み出してきた、と予測されるのである。

本稿では、以上をふまえて、ムンロンの三人のタイ族知識人によって2005年からなされているムンの歴史に関するビデオ CD作成活動を、直接の分析対象とする⁷⁾。そして彼らの活動の二つの側面に焦点をあてることにしたい。一つは、国境を越えるネットワークとは直接かかわらないが、ムンロンの国境の町としての特殊性に影響を受けている点である。今一つは、中国の少数民族となつたタイ族として、自らの文化を継承し、位置づけ

なおし、発展させてきた点である。

後述するように、彼らのうち50歳代半ばの二人は、文化大革命時に少年・青年期を送ったため、寺院で十分なタム文字教育を受けないうちに還俗させられた経緯を持つ年齢層の者である。この世代は、文化大革命以前にすでに成年僧としてタイ族文字文化を学んだ60歳以上の層と、仏教文化復興後に出来た40歳代以下の層のちょうど中間に位置する。知識人としての志向を持っていても、タイ族社会の中では伝統的知識人とは認められない、恵まれない世代であるといえる。また、他方に存在する、雲南民族学院で中国式の高等教育を受けた新しいタイプのエリート知識人とも異なり、彼らは自治州の公的な業務に関わることもできない。しかし、彼らは、対外開放と経済・文化活動の自由化が進んだ現在の状況の中では、その他のタイプのタイ族知識人とは異なり、既存の枠組みや公的な文化活動計画にとらわれず、自らの判断で自由に文化活動を行うことのできる立場にある。

本稿における論の進め方は、以下のようなである。まず、ムンロンという地が、どのような性格をもった場所であるかを示す。次に、タイ族知識人をカテゴライズした後、本稿で分析対象とする範疇のタイ族知識人が、その中でどのように位置づけられるかを示す。そして、このビデオ CD作りに関わった知識人たちが、具体的にどのようなバック・グラウンドを持っているかを見ていく。さらに、ビデオ CD作りの実際の過程と彼ら自身によるその位置づけ、および、ビデオ CDの内容について議論をしていきたい。最後に、国境に位置するムンロンという空間においてなされた知識人の文化活動として、このビデオ CD制作を位置づけてみたい。

2 ムンロン

ムンロンは、チェンフンから約60キロメートル

の距離のところにある、南北に細長い盆地に位置している。ナムガという川がこの盆地の真ん中を南から北に流れており、川はやがてメコン河に合流する。タイ族の村落は盆地の東西に一列ずつ、南北に長く横に並んでる〔深尾 2004〕。

ムンロンは、前述したように、前近代には他のムンとともにシプソンパンナーというムンの連合体をつくっていた。シプソンパンナーでは、複数のムンがまとまってパンナー Panna という、中国・ビルマに対する貢納単位をつくっていたが、ムンロンは一つのムンのみで一つのパンナーであった。このことから、ムンロンは前近代においては、シプソンパンナーの中でもかなり有力なムンであったことができる。中華人民共和国に組み入れられたのちは、ムンロンは勐龍鎮という行政単位となった。

ムンロンの南のはずれは、すぐミャンマーである。ムンロンの町からミャンマーとの国境までは、約20キロメートルしか離れていない。国境の向こう側にあるムンヨーン Moeng Yøng というムンとは、約60キロメートルの距離しかなく、ムンロンとムンヨーンとは相互に行き来がしやすい位置関係にあった（地図参照）。ムンヨーンはシプソンパンナーの中のムンではなかったが、シプソンパンナーのタイ族とほぼ同じタイ語方言を話し、ほとんど同じ宗教・文化伝統をもつタイ族の小国であった。また、ムンヘ Moeng He、ムンカン Moeng Kan というムンも、ムンロンから近かった。ムンロンは、シプソンパンナーの中でも、国境の南側の地域と行き来したり、物のやり取りをしたりする時に非常に有利な位置にあると言えよう。

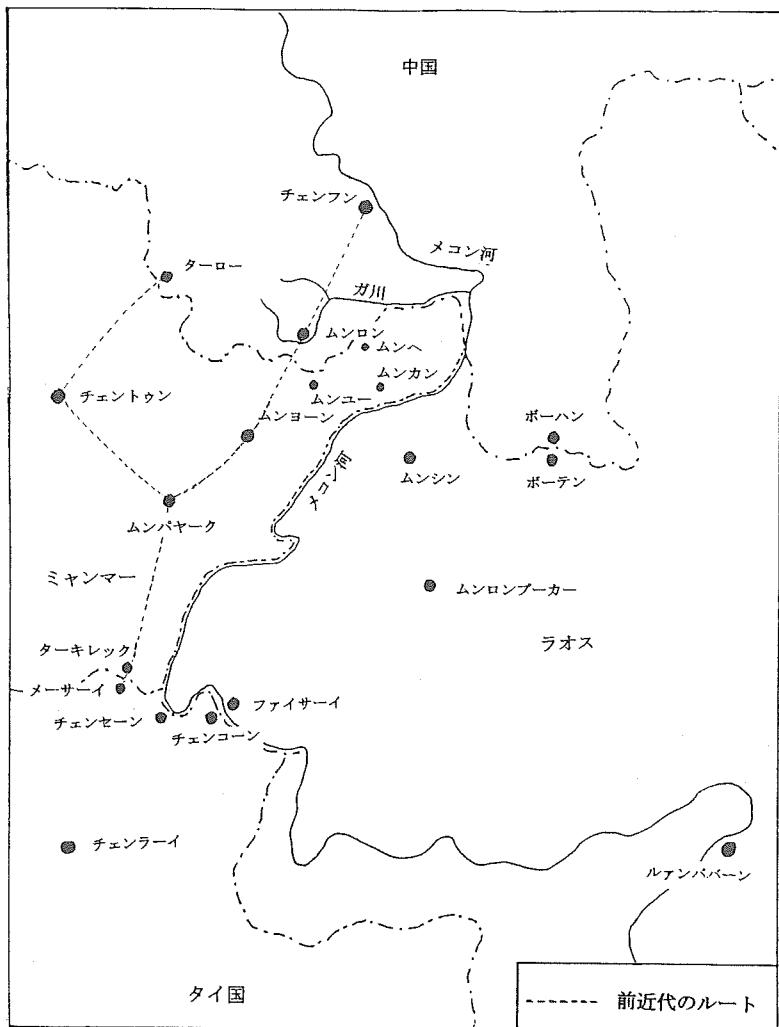
前近代においては、シプソンパンナーからビルマ（ミャンマー）やタイに行く際には、ムンロンを通っていくルートが重要なルートの一つであった。宣教師の記録には、北から中国人（ホー Hoo）の隊商が商品を南に売りに行くときに、ム

ンロンを通って行ったということがよく書かれている。また、『ムンロンの歴史』（後述）には、ムンロンの有名な僧侶は必ず南のタイ族のムンに行って仏教の知識を勉強したと書かれている⁸⁾。このように、南の同じタイ族のムンとの文化交流は、前近代から続いている、ムンロンの文化特徴の根幹をなす部分であると言える。

ムンロンは、現在でも、シプソンパンナーと北タイとのルートの途中に位置している。このルートは国境画定以前の前近代から現在まで、雲南から北タイをむすぶルートとして重要な役割を果してきたのである。それは交易のルートとして重要であつただけでなく、人や様々な情報が行き来するルートとしても重要であった。

新中国成立後、国境貿易は閉鎖され、文化大革命後の1980年代によく復活した。この中国の国境貿易の復活・発展の過程において、中国政府はチエントゥン Chiang Tung を通るルート（地図参照）などを重視し、そのルート上の国境の町は経済的に発展した。しかし、古くからの重要なルート上にあるムンロンは、その過程の中では利益をあまり得られなかった。ムンロンは国境に位置するムンであるが、国境貿易に関する政府の政策の中では重要な位置にはなかったのである。また、対外開放の結果、シプソンパンナーは全体としては観光地として有名になったが、その「辺境」に位置するムンロンはほとんど観光の対象とはなっていない。

1980年代に活発化したシプソンパンナーの文化復興は、政府主導で行われたものと、民衆主導でおこなわれたものがあった。政府主導による文化復興は、州政府のあるチエンファンが中心であったが、民衆主導の文化復興が活発に行われたのがムンロンであった。国家の辺境に位置して経済発展が遅れたというムンロンの不利な状況は、かえって民衆主導の文化復興には有利な側面もあった。デービス、ワサンも指摘したように、シプソンパ



地図 ムンロンとその周辺

ンナーの文化復興の過程では、南のタイ族の地域とつながるネットワークが重要な役割を果たしたが、国境に位置するムンロンは、南のタイ族の地域とつながりやすく、その意味で文化復興には非常に有利な場所にあったと言える。更に、シブソンパンナーの中心であるチエンフンや他の重要な国際交易ルート上の地より、政府による管理も厳しくなく、より自由な文化活動がおこないやすいという特徴がある。

一方で、ムンロンはチエンフンとタイ北部を結

ぶ古くからの交易ルート上にあり、チエンフンとも古くから密接な関係にあった。文化復興の過程において、ムンロンには、このルートによって、チエンフンから中国の現代大衆文化が流入し、南方からタイ族伝統文化が流入した。このようなマジナルな位置にあるムンロンの文化復興には、チエンフンと密接な関係を持ちつつ、一方でチエンフンとは異なる独自性を持つというダイナミックな面があった。

本稿で扱うムンロンの知識人の活動には、こう

した国境の町ムンロンのダイナミックな性格が反映されているのである。

3 タイ文字文化とタイ族知識人

(1) 「伝統的」知識人

さて、本稿では前述のように、タイ族知識人を、タイ文字（タム文字）の読み書きができ、それを使ってタイ族文化に関わる何らかの文化的・社会的活動をしているものと定義したい。

タイ文字の読み書きの知識は、先にも触れたように、伝統的には出家した時に仏教寺院で勉強して身につけるものであった。寺には、経典類以外、いろいろな種類の写本が保存してある。例えば、慣習法Hitkong、教訓書Pap Kamsorn、占星術書Pap Hula、医薬書Tamhaa Yaaなど、社会的に必要な知識が書いてある写本である。『ムンの歴史』Nangsuu Pun Moeng、『仏陀の世界巡遊記』Phacaw Lep Lok⁹⁾、仏塔の由来記などの、広い意味で歴史書と言えるものも含まれている。出家した者は、文字が読み書きできるようになったあと、それらの写本を読んだり書き写したりし、その関心にしたがって、写本に書かれている知識を吸収することができた。僧侶が自分の関心のある写本を選んで写し、幾種類もの内容を一冊に綴じ合わせ、還俗後に自分の家に持てかえって保管しておくということも、しばしばおこなわれた¹⁰⁾。

「伝統的」な形の知識人は必ず出家経験がある¹¹⁾が、出家経験があるからといって、それだけで社会から知識人と認められるわけではなかった。まず、未成年の少年僧の段階で還俗するのでなく、成人したあとも一定期間は還俗せず正式な僧侶でいることが、最低限必要だった。彼らは、還俗するとカナーーンKhanaan¹²⁾という尊称で呼ばれるようになる。カナーーンは各村に何人か必ずいるが、その中で知識が高いカナーーンが村人に認められて、プー・チャーンPuu Chaanと呼ばれる村の在家

の儀礼代表者になり、仏教儀礼のたびに村民の代表として儀礼のリーダーシップをとる。また、1950年以前には、特に高い知識を持っているカナーーンは、村落レベルを超えて、ムン全体の広い地域に知られて尊敬されていた¹³⁾。

このような形の知識人が存在したのは、シプソンパンナーのタイ族社会が中華人民共和国のもとで改変される前、遅くとも文化大革命開始前までであったと言える。

現在のシプソンパンナーでカナーーンであるのは、文化大革命の時代（1966年～1977年）以前にすでに成年僧であったもの、つまり60歳以上の層か、文化復興後に出家し還俗した青年層のものということになる。60歳以上のカナーーンは自らの興味で写本を書き写したりはしているが、それは新たな文化を創造する活動としておこなわれているわけではない。また、青年層のものは、タイ国の寺院に留学したり国際的な慈善活動に関わったりした例¹⁴⁾もあるが、これらの活動も自らの文化的アイデンティティ創出とは直接関係がない。彼らは、「伝統的」あるいは仏教的枠組みの中では活動しても、中国の少数民族であるタイ族としてあらたな文化を創造・発展させていくような文化活動をしていないのである¹⁵⁾。

(2) 新しいタイプの知識人

それに対して、1950年にシプソンパンナーが中華人民共和国に組み入れられて以降、新しいタイプのタイ族知識人が現れてきた。彼らは、1950年以降少数民族となったタイ族とそれを支配する中国側との政治的な力関係の中で生きてきた知識人である。彼らは、「伝統的」知識人と違って、活発に文化的活動を行うのが特徴である。

以下、三つに分けて説明していきたい。

1) 旧支配者層のタイ族知識人

まず、中華人民共和国に組み入れられてすぐの段階で現ってきたのが、1950年代に青年期にあっ

た、シプソンパンナーの旧支配者層の子弟で、文化的な活動と関わる中国側の機関で働くようになった人々である。

旧支配者層の子弟たちの多くは、タイ文字の読み書きもできるのに加えて、漢語教育も受けていたので、すぐに中国側の機関で働くことができた。その中で文化的な活動に携わった例としては、たとえば新聞記者や文化館での職についた例がある。彼らは現在、60歳代後半以降から70歳代であり、退職後も自らの知識と経験を活かして個人的な執筆活動をおこなっている人もいる。

2) 中国的高等教育を受けたタイ族知識人

その後現ってきたのは、文化大革命終了後にちょうど青年期にあり、選抜されて雲南省の省都昆明にある雲南民族学院で少数民族幹部となるべく中国式の高等教育を受けた人々の中で、シプソンパンナーにもどって文化に関わる仕事をしている人々である。彼らは旧支配者層の出身でもなく、また出家して僧侶として教育を受けたわけでもない、新しいタイプのエリート知識人である。彼らは、中国語が自由に使えるのはもちろん、雲南民族学院でタイ文字の読み書きも身につけることができた。例えば、西双版納新聞社や西双版納州政治協商会議の文化部門などにおいて、現在もその業務の中心的な存在である人や、ごく最近までそうであった人などがいる。現在は、40歳代半ばから50歳代である。

それより若い世代でも、雲南民族学院で教育を受けるものは、シプソンパンナーのタイ族の中から続けてあらわれている。彼らは、中国的教育を受けて、中国の少数民族としての自らを深く自覺しつつ、タイ族文化というものを考える存在と位置づけられる。

3) 「はざま」にある知識人

もう一つ、本稿で中心的に分析しようとしているタイプの知識人は、「伝統的」知識人ではなく、かといって中国的な高等教育を受けることもでき

なかった人々である。

彼らは、かつて少年僧としてタイ文字の読み書き能力を身につけたが、大躍進・文化大革命の時代に還俗せざるを得なかった。しかし、タイ文字文化に興味を持ち続け、文化復興後に自ら興味を持ってタイ文字の写本を集めて読むようになった者が挙げられる。年齢としては、50歳台後半から60歳代の者である。

4 ビデオCD「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」の制作者たち

2005年にムンロンで、「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」Nitaan Phabaat Phathaat heng Moeng LongというビデオCDが作られ、販売された¹⁶⁾。ビデオCDのケースのレーベルには、タイトルがタイ文字で書かれ、その下に「勐龍古塔伝説」(ムンロンの古い塔の伝説)という中国語タイトルもつけられている。販売価格は6元であり、手ごろな値段であると言える。

さて、ビデオCDのレーベルには、歴史資料収集には波喃旺曼掌と岩旺老師曼湯という人物が、解説には波喃旺曼掌という人物が、撮影には岩万曼湯という人物が、それぞれ当たったことが記されている。

波喃旺曼掌の波喃旺はタイ語でポー・ナーン・オンPoo Naang Onという人名、曼掌はタイ語でバーン・チャンBaan Changという村名であり、チャン村のポー・ナーン・オンという人のことを指している。ポー・ナーン・オンは、オンという名の女性の父親という意味である¹⁷⁾。以下、便宜的にAさんと呼ぶ。

岩旺老師曼湯の岩旺はタイ語でアーサイ・オンAay Onという人名、曼湯はタイ語でバーン・ターンBaan Thaangという村名であり、老師は教師という意味の中国語である。全体で、ターン村のアーサイ・オン教師ということになる。以下、便宜的にBさんと呼ぶ。

一方、岩万も同様にタイ語でアーアイ・オン Aay On という人名であり、先の岩旺老師曼湯と同名である。曼湯も同じくターン村のことである。岩万曼湯は「ターン村のアーアイ・オン」ということになり、タイ語にしてしまうと、「老師」という言葉がなければ岩旺老師曼湯と岩万曼湯とは区別がつかない。以下、岩万曼湯を C さんと呼ぶ。

では、彼ら自身への聞き取り調査¹⁸⁾で明らかになつた、それぞれの人物のバック・グラウンドを見てみよう。

A さんは、2006年の段階で56歳の男性であった。父親がカナーンで、プー・チャーンでもあった。出家経験は、少年僧として2年間であり、1964年に還俗させられた。その後、村のクワイ・チー¹⁹⁾（自転車や機械を直す）の職についた。ボーグ book（複数の村を含む行政単位）²⁰⁾が許可をして、自由に仕事をしてもよくなつたので、個人で自転車修理の店を開いた。現在も、自転車修理をしながら生計を立てている。時間があるので、タイ族の伝統的形の占い表や暦²¹⁾を自分で書いて、コピーして売った。時々、詩 khap や文章を書いて新聞に投稿した。また、テレビ・ラジオ局の番組用のタイ文字を書いたこともあるそうである。

彼は前述の暦を書くための資料として必要なこともあるって、タイ文字写本を集めたという。彼は、23冊の写本を持っており、その中の1冊はムンロンの歴史について新しく編纂された「歴史書」であった。その他の所有写本のうち、4冊はムンロンのチャン村で古くから伝承されていたもの、1冊は昆明にある写本からのコピーであり内容は法律であった。

還俗させられた時、A さんは14歳であった計算になる。つまり、12歳から14歳まで、寺でタイ文字を学んだのである。その後の、16歳から26歳ごろまでの時期は、文化大革命で、自由に学ぶことも文化活動をすることもできない時期であったことになる。だが、文化活動が許されるようにな

ると、生業ではないとはいえ、いろいろな文化活動を始めている。カナーンの中でも特に知識・教養があると認められた父親²²⁾のもとで育つことが、彼の文化活動に対する志向を育てたことは、容易に想像できよう。

B さんも2006年の段階で56歳の男性であり、A さんと同年齢である。住んでいる村が隣同士なので、A さんとは子供のころから知り合いであったという。出家経験が、少年僧としての2年間で、1964年に還俗させられたのも A さんと同様である。還俗させられたあと、彼は村の会計として働いた。その後、小学校の教師になった。隣のチャン村で10年、ブン村で2年、そしてその後は自分の村であるターン村で教師をしていたが、数年前に退職した。

彼は、長く教員という公務員職にあったので、行政側にも知り合いがいる。また、教員として勤めていたときには特に文化活動はしていなかったが、ムンロンのタイ文字写本を所有している村レベルの知識人をよく知っている²³⁾。

一方、C さんは、2005年の段階で30歳の男性であり、前述の雲南民族学院を卒業したが、少数民族幹部として働く道を選ばず、故郷に帰って野菜の栽培を生業とし、サイドビジネスとして儀礼や祭礼の際のビデオ撮影をしている。ビデオ CD レベルの一番下には、「撮制」（撮影・制作）として、勐龍（ムンロン）鎮・嘎因（カート・ノイ）村委員会の名とともに、「艾万影視工作室」の名が見える。艾万も、あてられた字は違うが、アーアイ・オンというタイ語名の漢字音訳であり、C さんのことである。艾万影視工作室は、彼が営むビデオ制作所の名である。C さんは、雲南民族学院のタイ語学部で勉強したので、タイ国語を話すことができる。

C さんは、A さんやB さんよりずっと若い世代に属するが、B さんと同じ村落に住んでおり、日常的な交流がある関係である。

筆者は、ムンロンで現地調査を行う中で、彼らによってこのビデオCD制作が発案される様子を観察することができ、また、制作後にインタビューをすることができた。以下、主にそれにもとづいて議論をしていく。

5 ビデオCD「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」制作の発案

筆者が2005年1月にムンロンを訪れた際、ムンロンの地理を知りたいので運転手つきの車を借りてムンロンのあちこちを見にいけないだろうかと、以前からの知り合いであったBさん²⁰に頼んだ。彼はタイ族の運転手が運転する車を手配し、合わせて彼の知り合いのタイ族二人にも筆者とBさんに同行するよう依頼してくれた。その二人が、AさんとCさんであった。Bさんが彼ら二人に同行を求める理由は、Aさんはタイ文字写本に関心がありムンロンの歴史と関係ある場所についての知識を持っているからであり、Cさんは雲南民族学院で勉強したので筆者の母国語であるタイ国語も話せ、また、彼がいれば訪ねた場所の様子を撮影して記録できると思ったからだ、ということであった。

筆者は彼らに行くべき場所を選んでくれるように頼んだ。我々は、一日かけて、南はミャンマーと中国の国境から北はムンロンの最北部まで走った。道すがら、AさんとBさんは、彼らが読んだことのあるタイ語写本の内容に言及しながら、ムンロンの景観について説明してくれた。また、彼らが選んだ仏塔と仏教寺院を訪れたが、それらはすべて、『仏陀の世界巡遊記』や『ムンロンの歴史』Nangsuu Pun Moeng Longの中に書かれている神聖な場所であり、その知識はタイ族の老人なら普通に知っているものであるということだった。結局、その日には、『仏陀の世界巡遊記』の中に出てくるムンロンの仏塔六つのうち、三つを訪ねることができた。AさんとBさんは、筆者と

ともに、それらの場所で出会った老人にインタビューし、Cさんはビデオの撮影をしていた。

一日車で見て回ったあの夕食の席で、その日に訪れたムンロンの神聖な場所についてビデオCDを作ろうという話が出た。Cさんは、自分がビデオCDの作成をができると言った。Aさんは、ビデオCDなら皆が見ることができるので、人々に資するだろうと提案した。それは、すなわち、タイ文字の読める人だけが読むことできる本よりビデオCDのほうが効果的であるということを意味する言葉であった。

このように、このビデオCD制作の発案は、実は筆者という外部の者にムンロンを案内したこときっかけとなってなされたものである。ムンロンの「地理」が知りたいという筆者の要求に対して、Bさんは、『仏陀の世界巡遊記』や『ムンロンの歴史』などのムンロンの「歴史」についての写本の内容を熟知しているAさんをパートナーに選んだ。彼らが用意した内容は『仏陀の世界巡遊記』や『ムンロンの歴史』といった写本の内容にもとづく説明であった。この認識の仕方は、そのまま、彼らの「地理」観を表すものとして興味深い。

そして、タイ国語が話せるなどの理由で呼んだCさんが、ビデオ撮影やビデオCD作成の技術を持っていたことから、ビデオCDという形で、ムンロンの「歴史」・「地理」に対する情報をまとめて発信しようというアイディアが出てきたのである。それは、タイ文字の読めない人も含めて、ムンロンの人々に自分の暮らすムンの「歴史」・「地理」に対する情報を提供しようという動きが、在地の民間の人々から起こったものと位置づけることができる。このような発想は、いわゆる「伝統的」タイプの知識人によっては、なされにくいものであると言えよう。

6 ビデオCD「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」の制作と販売

ビデオCDの制作が発案された約一年後の2005年12月終わりに、筆者がシプソンパンナーを訪れると、ビデオCDはすでに完成して販売されていた。AさんとBさんによると、その制作には四ヶ月かかったとのことだった。制作過程は以下のようである。

『仏陀の世界巡遊記』の中出てくるムンロンの中の仏塔は六つあるが、まずそれについてのビデオCDを作ろうということになった。

このビデオCDの制作に主として携わったのはAさんである。まず『ムンロンの歴史』の中の『仏陀の世界巡遊記』の部分（注9参照）の写本を探した。また、それらの内容をよく知っている老人にインタビューをした。そして、写本に書かれていることとインタビューで得られた情報に基づいて、ビデオCDに録音するための文章の原稿を書いたということである。

それから、彼らは助言を得るために、四つの公的な組織の長に、その文章を示した。その四人とは、①ムンロンの文化に関する事を司る、勐龍鎮の文化局の長、②自治州政府側のムンロンの長である鎮長、③中国共産党側のムンロンの長である、ムンロンの書記、④クー・ムン（ムンの師）と呼ばれる、ムンロンの仏僧の長、であった。これらの人々の認可を得た後、彼らは実際にビデオを撮る作業に入った。

実際にビデオカメラで撮影を行ったのはCさんである。AさんとBさんは、その映像の中にも出演している。現地の人々何人かと連れ立って、それぞれの仏塔や寺を訪問している映像である。Aさんは更に、仏塔や寺の解説者として、カメラの前に立って解説をしている。映像を撮り終わったあと、Cさんによってビデオが編集され、音が録音された。この際には、Cさんも声の出演をして

いる。

制作が完了したあと、彼らはそれを文化局に持つて金銭的な援助を求めたが断られ、その代わり、人々に自由に売ってもよいという許可を与えられたということだった。勐龍（ムンロン）鎮嘎因（カート・ノイ）村委員会からは、資金を500元もらった。ビデオCDレベルには、「撮制」（撮影・制作）として、勐龍鎮嘎因村委員会の名が入っているのは、そのためである。

彼らはこのビデオCDをまず300部作った。ムンロンは三つの地域thaewに分かれているので、一人100部ずつ担当ということで、それぞれが別々の地域で販売しようということになった。Aさんはヤーン村からサー村までの地域、Bさんはサー村からイェー村までの地域、Cさんはペット村からモン村までの地域である。

Bさんは、自分の分をムンロンのチェンファー村とミー村の女性小商人に委託販売してもらっている。彼女たちは、村の中の自分の店に置いたり、町の市場に持つて売ったりしている。実際何部売れているかの数は、委託販売なのでわからないそうである。また、別のムンでも、このビデオCDのことを聞いて、欲しいと言う人がいた。今、三人の手元に残っているのは、合わせて10枚ほどである。在庫は残り少ないが、ビデオCDは手に入れた人によっても簡単に複製されてしまうので、増刷するかどうかはわからない、ということである。

Bさんによれば、ムンロンの村人の間でのそのビデオCD評判はよく、ムンロン中で知られていることであった²⁵。別のビデオCDは作らないのかと人々に聞かれ、彼らはムンロンの創建伝承を扱った『ナーン・パパーワディー』 Nang Paphaawadii という別のビデオCD制作を予定していると答えたという²⁶。

以上の制作と販売の過程からは、三人が役割を分担していることがわかる。ビデオCDの中身を

つくる中心となったのは、資料収集とそれに基づく執筆活動などの文化活動の経験が長いAさんである。公的機関との交渉の中心となったのは、公務員として長く勤めていて公的機関とのコネクションを持っていたBさんである。また、ビデオCD作成の技術的な部分を受け持ったのは、AV機器を使いこなすことのできた若いCさんである。この活動は、それぞれが得意な分野を持つ三人がチームとして動いて実現したものであった。この点は、伝統的な在地知識人の活動とは異なるところである。

また、このビデオCDは、販売という形で三人にある程度の利益をもたらすものとなっている。では、そこに営利活動という側面を見ることはできるだろうか。この販売によっては、各人せいぜい6元の100枚分の600元の売り上げを得られるだけであり、作成コストを除いた利益は更に少なくなる。Bさんの例では、本人はどれだけ売れているかさえ把握していない。また、300部の作成をおこなう前に、公的機関からの補助を得ようとの努力がされており、実際、少額ではあるが勐龍鎮嘎因村委員会から補助を得ている。これらのことから考えると、この活動はやはり営利活動というより文化活動と位置づけるのがふさわしいものであると言えよう。

7 ビデオCD「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」の内容

次に、ビデオCD「ムンロンの仏足跡と仏塔の話」の内容を、制作者たちがどのように、その内容を構成・編纂したのかということを中心に考えてみたい。

以下は、このビデオCDの導入部分でなされている説明の日本語訳である。

ムンロンの聖なる場所である仏足跡と仏塔の話
Nitaan Phabaat Phathaat とムンロンの創始者

であるナーン・パパーワディーの話をごらんください。私たちは、パパーワディーの話を見る前に、仏陀の世界巡遊Phacaw Lep Lokの時代に関する仏足跡と仏塔の話に注意を払うべきです。

私たちは、このビデオ用に話を書き直すための主要な資料として、『ムンロンの歴史』第一部Pun Moeng Long noy thii 1を使いました。このビデオCDをつくった目的は、若い世代や文字の読めない人にムンロンの歴史を紹介することです。

私たちはまた、たくさんの村に行き、仏塔と仏足跡についての話を知っているお年寄りにインタビューをしました。そして、これらの情報を集めてこのビデオCDを制作したのです。私たちはプロではありませんから、このビデオCDの中には間違いもあるかもしれません。第二版で訂正することができるようお気づきの点をお知らせいただければ、非常にうれしく思います。

この説明では、このビデオCDの内容を構成するときの材料として、

- 1) 『ムンロンの歴史』第一部が主に使われたこと
- 2) インタビューの情報も加えられていることが示されている。

ここでいう、『ムンロンの歴史』第一部とは、『仏陀の世界巡遊記』のことである（注9参照）。以下、『仏陀の世界巡遊記』の写本の内容²⁰とビデオCDの内容にどのような違いがあるか、またインタビューの情報がどのようにビデオCDの中身に反映されているかを検討してみたい。

(1) ビデオCDに撮影された仏足跡・仏塔

このビデオCDには、三つの仏足跡と三つの仏塔の、合計六つの項目が取り上げられている。それは、以下のものである。

- ① チョムカイ Com Kay 仏足跡
- ② ナーニウ Naa Niu 仏足跡

- ③ ナーサン Naa Saang 仏足跡
- ④ ノン・サームカー Nong Saam Khaa 仏塔
- ⑤ フェイルン Feylung 村のタート・ノー（筍仏塔）
- ⑥ プーラーン Puu Laan の大仏塔

これらと、『仏陀の世界巡遊記』の写本に取り上げられている仏足跡・仏塔とを比較・対照してみると次のことが指摘できる。

まず、『仏陀の世界巡遊記』ではムンロンにある仏足跡・仏塔以外にムンユー、ムンローイ（現在ミャンマー領内）にあるものも取り上げられているが、ビデオCDの方ではそれは省かれていることがわかる。このビデオCDはムンロンというムンの単位を意識してつくられているため、ムンロン・ムンユー・ムンローイをひとまとめのものとして扱っている『仏陀の世界巡遊記』の世界観を引き継ぐことなく、必要部分を切り取る形となっているのであろう。写本では、『仏陀の世界巡遊記』を『ムンロンの歴史』第一部と題する場合においても、ムンユー、ムンローイ関係の記述をそのまま残しているのとは対照的である。

更に、『仏陀の世界巡遊記』にはないフェイルン村のタート・ノー²⁰（上記⑤）が、ビデオCDでは取り上げられているのが指摘できる。その写真は、このビデオCDのレベルにも使われている。

以下、それについて少し詳細に見てみよう。

(2) フェイルン村のタート・ノー

フェイルン村のタート・ノーの映像につけられた説明の最初の部分を以下、訳出してみる。

ムンロンの中心から3キロ離れたところにあります。筍に似ているのでタート・ノー（筍仏塔）と呼ばれます。仏塔の周りにはたくさんの花や樹木があり、その場所を美しくしています。仏陀がここに来たとき足跡を残し、後の人々が仏塔を建

設しました。この仏塔はムンロンのチャイ・ムン Cay Moung（ムンの中心）と認識されています。現在、それはフェイルン村のタート・ノーと呼ばれています。さまざまな民族の多くの人々がこの仏塔を訪れます。この仏塔はシプソンパンナーの主要な古跡の一つです。

この仏塔は、現在、シプソンパンナー内で観光資源となっている代表的な仏教建築物の一つである。上記の説明中にもあるように、観光化されて以後の整備で花や樹木が周りに植えられている。「さまざまな民族の多くの人々がこの仏塔を訪れる」、「この仏塔はシプソンパンナーの主要な古跡の一つである」という説明は、観光化されたこの仏塔の様子を示すものと言えよう。

この説明の後には、仏陀がそこにやってきた時の伝承と仏塔の建築・修築²¹についてが述べられ、最後に1995年に仏陀の立像が建てられたこと、毎年祭りがおこなわれることに言及される。仏陀到来の伝承や仏塔の建築・修築については、『仏陀の世界巡遊記』からではないものの、おそらくいずれかの写本に書かれている内容がひかれているものと考えられる。仏陀立像と祭りについては、おそらくインタビューなど、写本以外から得られた情報であろう。

このような説明内容を、他の五つの仏足跡・仏塔の説明と比較してみると、それぞれの仏足跡・仏塔がどこに位置するかが示される点は六つすべてに共通している。しかし、フェイルン村のタート・ノー以外の五つについては『仏陀の世界巡遊記』の写本で書かれているのとほぼ同じ内容のみが映像の説明として添えられている²²のに対して、フェイルン村のタート・ノーに添えられた説明は、上記のようにそれらとは異なっている。

その理由としては、この仏塔が観光化されており、伝承的な内容以外に視聴者に伝えたいことが多くあったということがまず考えられる。そして、

そもそも、『仏陀の世界巡遊記』内に記述がないにもかかわらずこの仏塔を取り上げたのは、この仏塔が現在ムンロンを代表する仏塔としてシブソンパンナー内外に知られているからであったと考えられる。

(3) インタビュー

最後に、ビデオCDの内容にインタビューで得た情報がどのように生かされているかということを考えてみたい。

上で検討したフェイルン村のタート・ノーの説明には、おそらくインタビューで得た情報が使われているであろう。それ以外の五つの中では、ノン・サームカー仏塔については、パートナー Pha Caa 村がその維持・管理を担っているということ、2002年に改修され、その時に『仏陀の世界巡遊記』の壁画が描かれたことが紹介されており（注30参照）、その部分はインタビューで得られた情報であるかもしれない。

しかし、フェイルン村のタート・ノー以外は、ノン・サームカー仏塔も含めて、ほぼ写本の内容そのものが映像に添えられた説明の主要な部分となっていることが確認できる。つまり、それぞれの仏塔・仏足跡の説明には、インタビューで得た情報は特に反映されておらず、情報源としてはあくまで写本が主であったように見えるのである。

ではなぜ、制作者たちは個々の仏塔・仏足跡についてインタビュー調査を実施したのだろうか。前述のように、彼らは研究者である筆者の調査に同行しており、その調査手法の一つとしてインタビューをおこなうのを見ている。このことは、ビデオCD制作のためにインタビューも取り入れようとした、きっかけとなっている可能性がある。

彼らがインタビューによって仏陀世界巡遊の伝説について更なる情報を入手しようと意図していたのかどうかはわからない。あるいは、インタビューをしてみたものの、結果的には仏陀世界巡遊の伝

説としては写本に書かれているのと同様の内容しか得られなかっただという可能性もある。しかし、いずれにせよ、ビデオCD中にインタビューの場面を入れることによって、その内容を専門的・学問的に見せるという効果を出し、政府に認められやすくしようしたのではないだろうか。

このビデオCDは、『仏陀の世界巡遊記』の中に出でてくる仏足跡・仏塔を主に扱っているとはいへ、仏足跡・仏塔のうちムンロン以外の地にあるものや、更にはムンロンの盆地部から遠いものを切り捨てている。また、観光化の流れの中でムンロンの代表的仏塔となったフェイルン村のタート・ノーを加えている。この意味で、このビデオCDは、内容的には、『仏陀の世界巡遊記』にかなりの変更を加えて「再編」したものであると位置づけることができるだろう。

それに加えて、インタビューという取材方法を取ったことを示すことによって、写本を元にはしているが、この情報が専門的・学問的なものであるとの形を整えているのである。

8 おわりに

最後に、民間の知識人が国境に位置するムンロンという空間においておこなった文化活動として、このビデオCD制作がどのように位置づけられるかをまとめておきたい。

このビデオCDは、外部の者にムンロンを案内して写本の『仏陀の世界巡遊記』に書かれている内容を紹介したことがきっかけとなって、三人のタイ族知識人が自ら発案し制作したものである。三人のうちAさんとBさんの二人は、大躍進・文化大革命の時代に還俗せざるを得なかったが中国的な高等教育を受けることもできなかった「はざま」の世代に属していた。もう一人のCさんは若く、近代的技術を身につけていた。この三人が役割を分担して、このビデオCDを制作した。資料収集とそれに基づく執筆活動などの経験が長いA

さんがビデオCDの中身をつくる中心となり、また、公務員として長く勤めていたBさんが公的機関との交渉の中心となり、そして、AV機器を使う技術を持ったCさんが技術的な部分を受け持った。

このビデオCD制作は、ムンロンの人々に自分の暮らすムンの「歴史」。「地理」に対する情報を映像・音声資料として提供しようというものである。ビデオCDは、シプソンパンナーでも多くの家庭にその再生機があり、それほどの金銭的負担もなく購入できる。そして購入しさえすればすぐに、自らのムンの歴史についての「伝統的」情報を、タイ文字の読めない人も含めたすべてのムン内のタイ族が得ることができる。このような発想は、いわゆる伝統的タイプの知識人によっても、中国的高等教育を受けて指導的な公務員として働くエリート知識人からも、出てこないものであろう。

また、このビデオCD制作は、公的機関の主導によるものでなくタイ族知識人が自ら発案して実行したものである点は重要である。ただし、このビデオCD制作も、各種の公的機関の認可を経てはじめて制作し、販売することができた。直接、公的機関の元にないという点で中国的高等教育を受けたエリート知識人とも異なり、しかも「伝統的」知識人とも違って公的機関とのチャンネルを持つていた彼らのチームだからこそ、このビデオCD制作は実現したものであると言えよう。

AさんとBさんは伝統的な意味でも近代教育の面でも、いわゆる学問的基礎はしっかりしていないが、伝統的価値観や政府の公式見解にしばられず、生活者の視点で文化創造ができる。そしてそこには、対外開放・観光開発がなされる過程で有名になった仏塔も、写本で紹介されている仏塔と並べて取り上げるという、彼ら自身の価値観に沿った、ムンロンのタイ族文化の表明がなされているのである。

またムンロンは、「辺境」に位置しているため政府による管理が厳しくなく自由な文化活動をおこないやすい一方、シプソンパンナーの中心であるチェンファンにも遠くなく、中国の現代の大衆文化であるビデオCD文化などがチェンファンを通して普及しているということも、彼らの活動にとって有利な条件であっただろう。彼らがこのような活動を自由な発想でおこないえたのは、ムンロンという地においてであったからと言えるのである。

では、彼らが、このビデオCD作成を通じて自らの文化を継承し発展させようとする方法は、どのようなものと評価できるだろうか。

これらのムンロンの知識人たちは、自らが所持してきた文化資本、つまりムンの歴史について書かれた写本を利用している。これは文化の継承にあたる部分である。しかし、実際のビデオCD作成にあたっては、写本の内容を取捨選択しつつ新たなものも付け加え、ムンロンの歴史的仏教「遺跡」の映像をも付加して、ビデオCD版の新しい『ムンロンの歴史』をつくろうとしている。国家周辺地域の激しい社会経済変容の中で、彼らはこのようにして、自らの文化的アイデンティティを再定義しているのである。

このことは、自らの文化を独自のものとしてシプソンパンナーの文化全体から差異化する行為ではあるが、政府の文化政策と矛盾するものではない。実際、彼らが所持してきた歴史に関する写本では国境を越えて古くから親密な関係にあるムンヨーンなどにも言及しているが、新たに作成したビデオCDではムンロンの仏教「遺跡」風景のみを扱っており、あくまで中国国境内の文化であるように表現している。またビデオCDという素材は、近代的メディアの一つとして、中国政府も奨励している。こうした表現のあり方は、政府の政策と矛盾させずに、自らの文化的アイデンティティを主張する、彼らムンロンの知識人の戦略といえる。

〔注〕

1) ムンというのは、前近代においては、町を指すと同時に、その町を中心とした小国のこととも意味するタイ Tai 語である。

中国西南部から東南アジア大陸部北部にかけての地域は山地が多く、そのところどころに盆地が開けている。この地域に住むタイ族が前近代につくっていた小国であるムンは、基本的に、ひとつひとつの盆地に対応する形でつくられていた。盆地部には主としてタイ族が住んでいたが、周辺の山地にはアカ族などの非タイ系の人々が暮らしており、ムンの支配者たちに対して貢納をおこなっていた。

2) シプソンパンナーだけではなく、ミャンマーのシャン州やタイ国北部、ラオスの、仏教を受け入れているタイ系民族により広く使われている。仏教経典(タム)を書くのに使われる文字として、タム文字と呼ばれることがある。文字の形に少し差があるが、別の地域のものであっても相互に読むことが可能である。

それとは別に、1956年には新タイ文字と呼ばれる文字が、タム文字をもとに作られている。本稿では、タイ文字とだけ言うとき、新タイ文字ではなくタム文字を指すものとする。

3) 本稿で言う「タイ Tai 族」とは、タイ Tai 語を話し、上座仏教を信じ、タム文字文化を持っていて、現在、中華人民共和国・ミャンマー・ラオス・タイの四つの国の国境を跨いで居住しているグループである。そのうち、中華人民共和国・ミャンマーにおいては、少数民族という扱いになる。

中華人民共和国の西双版納(シプソンパンナー)自治州のタイ族は、中国語では「傣族」(ローマ字表記は dai zu)と呼ばれている。彼らは、同じ地域の他民族と自分たちとを区別したいときには、自分たちを「タイ Tai」と呼んでいる。また一方で、彼らは「タイルー Tai Lue」と呼ばれることもある。

タイルーの「ルー」は元々、タイ語の方言の一つを示している。タイ族の分布する広い地域の中では、文字は同じだが、発音の違いなど方言差がある。この中の一つの方言系統を「ルー」というのである。ルーと呼ばれる人たちは、シプソンパンナーを中心として居住しているが、移住するなどして他の地域に住んでいる場合もある。例えばタイ国北部、ラオスの北部、ビルマのシャン州にも「タイルー」は住んでいる。つまり、「タイルー」という呼び方で客観的に示されるのは、「シプソンパンナー」、または「シプソンパンナー」を故地とするタイ族の一のグループなのである。

- 4) シプソンパンナーの写本は、ポップと呼ばれる紙の折り綴じ本の形態をとっていることが多い。ポップには、サーという木(カジノキ)から作られた紙が使われる(ポップ・サー)。他に貝葉に書かれた写本もあるが、貝葉にタムを書くのには特殊な技術が必要とされる。また、最近では普通の紙に書かれることもある。
- 5) 1980年代終わり以降は、シプソンパンナー現地の学校教育や職場の研修の中でもタム文字の教育が積極的になされた時期があった。例えば、シプソンパンナーの新聞社では、職員向けのタム文字の研修があった。
- 6) 中国語では、窪跋界という文字があてられる。パートニー寺には現在、西双版納傣族自治州仏教協会が置かれている。
- 7) 筆者は、大きな枠組みとしては、1980年代後半以降に見られるようになった、タイ族知識人によるタイ族文化の復興・再編・発展の過程全体を分析の対象とすることを目標としている。
- 8) 例をあげると、マハーパー・アナータ・テーラ Mahapaa anaatha thera という17世紀の有名な僧侶についての記録が残っている。彼は南のタイ族地域に留学している。
- 9) 『仏陀の世界巡遊記』は、『ムンの歴史』Nangsuu Pun Moeng の最初の部分として、書かれていることも多い。
- 10) このような写本は、筆者の調査中にも、シプソンパンナー各地のタイ族の民家で目にすることができた。
- 11) シプソンパンナーにおいても、タイ族の男性は、一生に一度は出家するのが理想とされる。
- 12) 個人の名前の前にカナーンをつけて、呼び名としても使われる。
- 13) そういう意味では歌手(Chang Khap チャンカップ)も知識人のグループにも含めてもよいが、彼ら・彼女らの知識は、文字で書かれたものに依拠する知識ではなく、口頭で伝えられる知識のほうが中心である。
- 14) 特に僧侶であるうちにおこなわれた例が多い。
- 15) 彼らが文化的・社会的活動をおこなえない理由は、一つには彼らが中国政府側とのチャンネルを持っていないからだと考えられる。
- 16) ビデオCDは、1995年ごろからシプソンパンナーにおいて普及はじめ、現在ではほとんどの家庭にビデオCDのプレーヤーがある。
- 17) シプソンパンナーのタイ族の名乗りは、自分自身の名を名乗る方法と子供の名を使ってその父あるいは母であると名乗る方法の二つがある。
- 18) 聞き取り調査は、2005年1月、2005年12月、2006

- 年3月におこなった。
- 19) 中国語由来のタイ語であるが、もとの中国語が何であるかは不明である。
 - 20) 同名の行政単位は、1950年代以前のタイ族政権下でも使われていた。
 - 21) ナンスー・ピーマイ Nangsuu Piimay と呼ばれる新年用の暦で、日の吉凶なども示してあるものである。
 - 22) 父親がブー・チャーンでもあったのは、文革前の彼の少年期なのか、それとも、文革後、つまり彼が20歳代後半以降のことなのか、確認はとっていない。
 - 23) 筆者も彼から「伝統的」知識人を紹介してもらって聞き取り調査をしたり、個人所有のタイ文字写本を借りてきてもらったりした。
 - 24) Bさんと筆者は、筆者がチェンファンの友人の家を訪ねた時に知り合った。友人の妻の父にあたる人であり、それまでに、ムンロンのタイ文字写本を持っているタイ族知識人を紹介してもらったことがあった。
 - 25) Aさん、Bさんに対する2005年12月のインタビュー
- による。
- 26) ナーン・パパーウディーとは、伝説上の人物である。彼女はチェンファンの王女であり、ムンロンの創始者である。
 - 27) 同じタイトルの同一の内容を扱ったものでもさまざまな写本があり、取り上げられている仏塔・仏足跡やその記述の詳しさの程度なども写本によって違いがある。本稿では、筆者がムンロンで撮影した写本の内容との比較・対照をおこなう。
 - 28) この仏塔自体には、仏陀が訪れた場所であったという伝説はある。
 - 29) 二人の僧侶がリーダーとなって幾人かの人々とともにこの仏塔を建てた、後にムンロンのタイ族の人々が仏塔を修築したという内容である。
 - 30) ノン・サームカー仏塔についてのみは、パーチャー Pha Caa村がその維持・管理を担っているということ、2002年に改修されてその時に『仏陀の世界巡遊記』の壁画が描かれたことを紹介し、壁画の画像も映し出している。

参考文献

- 《西双版納自治州概況》編寫組 1986『西双版納自治州概況』民族出版社。
- 長谷川清 2001「観光開発と民族社会の変容－雲南省・西双版納傣族自治州」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』京都：世界思想社。
- 深尾葉子 2004「ゴムが変えた盆地世界：雲南・西双版納の漢族移民とその周辺」『東南アジア研究』42(3) : 294-327。
- Appadurai, Arjun. 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Davis, Sarah. 2003. Pre-modern Flows in Postmodern China: Globalization and the Sipsongpanna Tai, *Modern China* 29(2): 176-203.
- Hasegawa Kiyoshi. 2000. Cultural Revival and Ethnicity: the Case of the Tai Lue in the Sipsong Panna, Yunnan Province. In *Dynamics of Ethnic Cultures across National Boundaries in Southwestern China*, edited by Hayashi Yukio and Yang Guangyuan. Chiang Mai: Ming Muang Printing House. pp. 121-137.
- Isra Yanatan. 2002. "Revival of the Tai Lue Scripts in Sipsongpanna, Yunnan Province". M.A. Thesis, Graduate School of International Development, Nagoya University.
- Keyes, Charles F. 1995. Who are the Tai? Reflections on the invention of identities. in *Ethnic Identity: Creation, Conflict, and Accommodation*, edited by Lola Romanucci-Ross and George A De Vos. Walnut Creek, CA: Altamira Press.
- Walker, Andrew. 1999. *The Legend of the Golden Boat: Regulation, Trade, and Traders in the Borderland of Laos, Thailand, and Burma*. Surrey, UK: Curzon.
- Wasan Panyaakae. 2003. Moving Dai: A fictional story from the field. *Thai-Yunnan Project Bulletin*. 5 (November), pp. 12-15.
- _____ 2005. Moving Dai: Story from the filed. *Thai-Yunnan Project Bulletin*. 7 (March). pp. 5-12.